

1. 単元名 本の世界を深めよう 『海のいのち』

2. 主張

夢中になって読み深め、仲間とともに感性を磨く。

子どもたちの心は、純粋でスポンジのようだ。日々の中で、見たり感じたりする経験が充実すればするほど、その心は伸びていく。私はそう思っている。子どもたちは、いろいろな経験を通して、多くのことを吸収している。そして、そこから自分なりの「思い」や「考え」を持つようになり、思考力・表現力を高め、感性を磨いていくのだと思う。

しかし、目の前の子どもたちを見ていると、経験の不足からか、自分の考えを伝えることができなかつたり、仲間の思いを受け取ることが苦手だつたりするものがある。また、サラツとしていて、どこか物事に一生懸命になれない雰囲気も感じている。

物語においては、文章を読みながら自由に想像を膨らませることができのだから、子どもたちには、仲間と一緒に、たくさん感じたり考えたりさせていきたい。今回設定した作品では、主人公の「生き方」が主題となっていて、6年生だから考えられるテーマともいえる。力強く生きていく少年。作品のなかにあふれる優れた表現。これから翔いていく子どもたちにとっては、いろんなことを感じたり考えたりでき、思わず語りたくなつたり聞きたくなつたりする、そんな作品のよさがある。

自分の考えを伝える喜び、友達の思いを受け止める喜び、仲間と読み深める楽しさをこの単元を通して子どもたちに実感させたい。夢中になって読み深め、感じたり、考えたり、活発に表現したりする姿を目指していくのである。それが、子どもの「感性を磨く」ことにつながっていくのだと考えている。

3. 題材について

(1) 教材観

学習指導要領から

A [話すこと・聞くこと]

目標 (1) 目的や意図に応じ、考えたことや伝えたいことなどについて、的確に話す能力、相手の意図をつかみながら聞く能力、計画的に話し合う能力を身に付けさせるとともに、適切に話したり聞いたりしようとする態度を育てる。

内容 ア 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報を関係付けること。
エ 話しての意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。

B [書くこと]

目標 (2) 目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考え文章に書く能力を身につけさせるとともに、適切に書こうとする態度を育てる。

内容 ア 考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理すること。
イ 自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えること。
ウ 事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。

C [読むこと]

目標 (3) 目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身につけさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。

内容 エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。
オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。
カ 目的に応じて、複数の本や文章などを選んで読み比べて読むこと。

単元のつながり

5年	本の世界を深めよう	教科書の作品をきっかけとして、同じ作者や同じテーマの作品に興味を持ち、読書発表会を通して考えを広げたり深めたりする。
6年	本の世界を深めよう	自分の興味や関心を広げたり深めたりするために、必要な図書を選んで読み、自分の意見や感想、その本の内容を工夫しながら話す。

6年生になってから文学的文章教材では『美月の夢』『川とノリオ』を学習した。『美月の夢』では、叙述に即して登場人物の心情を想像しながら詠む学習を進めた。『川とノリオ』では、優れた描写を味わいながら、登場人物の心情や場面の様子について読み進めていった。『海のいのち』でも独特な表現に触れながら、主人公の心情の変化について集団で読み深めていく。想像したことや感じ方・受け止め方の違う点を、言葉や叙述に基づいて楽しく語り合うことを大切にして、読書への意欲を高めることにつなげていく。

教材の価値

教材文の「海のいのち」は、主人公「太一」が海に生きる「おとう」や「与吉じいさ」との関わりを通して成長していく姿を描いた物語であり、自然への畏敬の念や命の連鎖を読み手に感じさせる作品である。他の登場人物とのかかわりを通して、人としてたくましく成長していく主人公の姿や作品にちりばめられた特徴的な表現は、児童が叙述を基に自分の考えをもったり、友達の考えを聞き自分の読みを深めたりするのに適した教材である。

主人公である太一は、父親の仇である「クエ」と対峙する。しかし太一はクエを討つことはしなかった。そこがこの物語のクライマックス場面でもあり、太一の変容が現れる部分でもある。読み手は「なぜ討たなかったのだろうか」と疑問を持つことであろう。今回はその疑問を中心として太一の成長、他の登場人物とその人たちとの関わりを読み進めていく。子どもたちは疑問の答えを探しながら、優れた表現に触れたり、登場人物の生き方を考えたりすることができるであろう。

構成上の特色

【起承転結の構成】

本教材は、海という自然を舞台に、主人公の成長の姿が描かれている作品である。主人公「太一」の少年期から始まり、青年、壮年になるまでの生涯を六つの場面から構成してある。この物語は、以下のような構成からなっている。

起＝物語の始まり

- ①子どもころから漁師にあこがれている太一と、父が水中でこときれていることを知る太一。

承＝始まった話を受け継ぐ部分

- ②与吉じいさに弟子入りする太一。
- ③与吉じいさの死を受け入れる太一。

転＝物語が展開するところ・クライマックス場面

- ④母の悲しみも背負おうとする太一と、とうとう父が死んだ瀬に来る太一。
- ⑤父を破ったクエと出会ったが、殺さない太一。

結＝話のむすび

- ⑥村一番の漁師であり続けた太一。

6つの場面には起承転結の構成がはっきりと現れている。このはっきりとした作品構成により、子どもたちは場面の展開に沿って読むことができ、優れた叙述に着目しながら自分の考えを持つことができるであろう。

表現上の特色

【象徴的な表現】

題名の『海のいのち』、書き出しの「海のどんな表情でも」、父の言葉の「海のめぐみ」、与吉いさの言葉の「魚を生みに自然に遊ばせてやりたくなるとる」、そして結びの「海のいのちは全く変わらない」といった表現によって、繰り返し海は人間のように命あるものとして描かれている。また、書き出しの「父もその父も～父親たちが住んでいた海に」や太一の「海に帰りましたか。～ぼくも海で生きられます」「与吉いさも海へ帰っていったのだ」などは、海と「いのち」のつながりをイメージさせる。

この物語は、表現から自然への畏敬の念や「いのち」のつながりの豊かさについて読み手に感じさせ、また、登場人物の生き方も考えることができる作品である。

【語りかけるような文章】

この作品は、短い文章で叙事と会話が中心に語られている。描写や説明は少ないから読者はテンポよく次々と読み進めていくことができる。それは、時間の経過をとらえさせ、太一の成長していく様子をつかむことができる。また、常体の語り口と短い文章とがテンポのよさを作っている。

【優れた表現】

物語の中には心情を考えたり、想像を広げたりできる優れた表現がある。

「光る緑色の目をしたクエ」では、どこか不気味な雰囲気もあるが、光る緑色などは魅力的なイメージも広がってくる。「海中に棒になって差し込んだ光」「耳には何も聞こえなかったが、太一は壮大な音楽を聞いているような気分になった。」では、海にもぐったときの世界が広がる。海の中をそう感じられる太一の心情も想像が膨らむであろう。

また、大魚クエのイメージは、「まるで岩のような魚」「青い宝石の目」「ひとみは黒いしんじゅのよう」「刃物のような歯」「岩そのものが魚のよう」という比喻によって描写されている。そこからは、大きく、美しく、かつ恐ろしい、矛盾をはらむ神秘的な世界が広がる。比喻という表現技法に触れながらより深く読み進めていくことができるであろう。

(2) 子どもの実態 (男子18名 女子15名 計33名)

本学級の子どもたちは、明るく活発であり、さまざまな学習活動に意欲的に取り組んでいる。発言に対しても、一人一回は発言することを学級の目標にもしている。しかし、問われた内容によって挙手する意欲は偏ってくる。例えば算数の答え合わせや国語の意味調べなどといった、答えがはっきりとしているものは積極的に手を挙げる。一方、ノート等に書き込んであっても「どう思うか」「どう感じるか」といった思いや考えを聞かれる場面では伝えることに消極的になる部分がある。発言者も偏りがちであることが実態として言える。

読書への取り組みにおいても、2極化が見られる。読書の奨励が進められなかったことも原因として考えられるが、目の前の子どもたちの中には、自主的に本を選び、朝読書の時間、隙間時間に引き出しから本を手にとり読書に励んでいる者もいれば、自ら本を手にとらない者もいる。その場合、主に漫画のような読みやすい本を選んでおり、物語などの長い読み物には苦手意識がある。

読むことの学習においては、これまで言葉を根拠に想像を広げる活動を行ってきた。

『美月の夢』では、一人読みを行いながら、主人公の心情を表す言葉を見つけ、想像を広げ、そこから自分がどんなことを考えるかという読み方を学習している。『川とノリオ』では、一人読みをもとに、優れた描写を見つけた。時間の経過を踏まえながら、一つ一つの描写を味わい、登場人物の心情や場面の様子を思い描きながら仲間とともに読み進めた。

これまでの学習を通して、一文一文に注目するようになり、話し合いでも叙述をもとに登場人物の心情を読み進められるようになってきた。しかし、物語の内容について考えたことを伝え合おうとする意欲は弱いものがある。これまでの学習と本教材の良さをリンクさせ、子どもたちが夢中になって読み進める姿を目指して行く。

(3) 指導観

作品との出会い (見出す)

まずは、子どもたちと作品との出会いを大切にしたい。『海のいのち』は絵本として出版されており、子どもたちにはこの作品を「絵本の物語」として出会わせる。絵本の世界を学習することとし期待を膨らませたい。

絵本を初めて提示するときは、表紙を見せながら「題名読み」を行う。題名から感じることを自由に言わせ、作品への期待を高める。「海」も「いのち」という意味もある程度子どもたちも意味をつかめるであろう。しかし、「海のいのち」となるとその意味は簡単にはわからないはず。子どもたちは、「どういう意味なのだろう」、「どんないのちだろうと」「海のいのちとは一体なんなのだろうか」と考え、読むことへの期待を高めるとともに読み進めていく上での課題意識を持たせる。

そして、読み聞かせを通して初発の感想を抱かせる。従来のように教科書をよむのではなく、読み聞かせという形をとり「物語の世界」大切にする。また、初発の感想を語り合いながら、話題が集中した場面や、疑問に思ったことなどをこれからの読みのめあてとして位置づけていく。

一人読み (調べる)

より作品を読み進めるために、まず自分なりの読みを持たせる。『川とノリオ』では、好きな表現、気になる表現、わかりにくい表現に着目しながら一人読みを進めてきた。『川とノリオ』には、擬人法、比喩、倒置法といった表現が豊富に含まれていた。子どもたちは、その優れた表現に気づき、想像を広げられるようになりつつある。

そこで本作品の中では以下のように一人読みを進める。

現段階の一人読みのやり方として以下の方法で取り組む。

- ①学習する場面のワークシートを用意する。
- ②まず表現に視点を置いた一人読みを行う。
好きな表現・気になる表現・わかりにくい表現を見つけサイドラインを引く。
- ③課題に対しての一人読みを行う。
例えば「なぜ太一は、クエを討たなかったのか」という課題に対する自分なりの考えを持つ。その根拠となる文章を見つけサイドラインを引く。
- ④サイドラインを引いた言葉から情景や登場人物の心情を想像し書き込む。

話し合い (深める)

本作品を話し合い読み深めていくにあたって、話し合いの視点を明確にする。

◎視点その1 「起」の場面における物語や人物の設定を読み深める。

まず、物語や人物の設定を読む必要がある。「いつ」「どこで」「どんな状況で」「どんな人物が」描かれているのかを確認する。「起」の場面では、「いつ」「どこで」「状況」「人物」の4つに視点を置き話し合う内容を明確にする。

◎視点その2 「比較」によって登場人物の行き方や考え方の違いを読み深める。

話が広がる「承」の場面では、おとうと与吉いさの人物像の共通点、違いについて読み取らせる。二人の相違点では死んでしまった場面の描写、漁の方法等を比較させ、二人の海に対する生き方の違いについて話し合い活動を進める。

◎視点その3 「転」の場面における太一の心情の変化について読み深める。

太一が大きく変容した(クライマックス場面)はどこかについて話し合う。太一の心情の変化を考えると、「本当にクエを討とうとしていたのか」を問題として、叙述をもとに根拠を挙げさせる。そして「なぜ、太一はクエを討たなかったのか。」を学習問題に設定し話し合う。

以上の3つの視点をもとに話し合い活動を組織していくのだが、話し合いを始める前に、まず課題に対して、一人読みをもとにして自分なりの考えを書かせる。自分なりの考えをある程度まとめさせてから話し合いに移るようにする。また、ペアやグループなど話し合いの形態を工夫しだれもが話せるような雰囲気を作る。

まとめの感想（まとめあげる）

毎時間の最後、また学習の最後の時間には、まとめの感想を書く時間を確保する。「海のいのちとは何か」「太一の生き方をどう思うか」主題となる部分にいつも変えるようにして、考えが深まるようにする。

集団で読んだことを最後には個人に戻し、読みの深まりを実感させていく。その感想を伝え合うことで、共感したり、違いを発見したりしながら、集団で読む楽しさを体感させていく。

読書活動へつなげる（まとめあげる）

立松和平の「いのち」のシリーズ「山のいのち」「川のいのち」「木のいのち」「街のいのち」「田んぼのいのち」の本を紹介する。

それぞれの作品の中にある、作者からのメッセージを自分なりに読み取る。読み取ったものを作文に書き、読書座談会で紹介しあう。

4. 単元のねらい

[関心・意欲・態度]

- ・文章を読んだり、仲間の考えを聞いたりしながら、自分の考えを積極的に発表することができる。

[話すこと・聞くこと]

- ・読書座談会で、自分の考えをはっきりさせながら、計画的に話し合うことができる。

[書くこと]

- ・目的や意図に応じて自分の考えを効果的に書くことができる。

[読むこと]

- ・自分の考えを広げたり深めたりするために、積極的に図書資料を読むことができる。
- ・登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むことができる。

5. 全体のプラン 全12時間扱い

	プロセス	学習内容	時間
第 一 次	見出す	・題名読み ・初発の感想をノートに書き発表しあう。	1
		・新出漢字の練習をする。 ・意味調べをする。	課外
		・初発の感想を発表し、読みのめあてを立てる	1
	調べる 深める	・時、場、人物を確認しながら場面を4つ（起承転結）に分け、物語の粗筋をつかむ。	1
		起（場面1） ・物語や人物の設定を読む。 ・おとうの死、太一のおとうへの憧れ、畏敬の念を読む。	1
		承（場面1, 2, 3） ・おとうと与吉いさの人物像を比べて読む。	2
		転1（場面4） ・母の不安を知りながらも、父の死んだ瀬にもぐる太一の思いを読む。	1
		転2（場面5） ・瀬の主に出会うが、葛藤の末にもりを打たなかった太一の思いを読む。	1 本時
まとめ 上げる	結（場面6） ・村一番の漁師であり続ける太一を読む。 ・学習後の感想を書き、話し合う。	1	

第二次	見出す	・教材文を読んで、読書座談会の目的や概略を知る。 ・「山のいのち」「川のいのち」「山のいのち」「木のいのち」「街のいのち」「田んぼのいのち」といった立松和平の「いのち」シリーズの本を知る。	1
	調べる 深める	・「いのち」シリーズの本を読む。	課外
		・「読書座談会」の準備をする。 (自分のお気に入りの1冊を決め、自分の一番伝えたいことを資料にまとめる。)	1
まとめ 上げる	・読書座談会 同じ作品を選んだ者同士、また違う作品を選んだ者同士でグループを作り読書座談会を開く。	1	

6. 本時 (8 / 12)

(1) ねらい 太一の変容について話し合うことを通して、太一的心情が変容した理由とどのように変容したのかについて読み取ることができる。

(2) 展開

時配	子どもの活動	支援・留意点 (○) 評価 (☆)	資料
3分	前時までの学習を振り返り、本時の課題を確認する。	○挿絵を黒板に貼りながらこれまでの学習内容を振り返るとともに、初発の感想で出ていた疑問を再確認する。 ○挿絵を起承転結に合わせて貼り、構造的に板書できるようにする。	拡大した挿絵
1分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;">太一は、なぜクエをうたなかつたのか。</div> ・前時に書いておいた、話し合う前の自分なりの考えを読み返す。	○課題を書いた短冊を黒板に貼る。	学習課題の短冊
5分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;">太一がクエをたおそうとしていたのはどこからわかる？</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 20px; padding: 10px;"> <p>・「太一が瀬にもぐり続けて、ほぼ一年が過ぎた。」 → 激しい潮の流れにもかかわらず一年以上ももぐり続けている。それだけクエを追い求めている。</p> <p>・「興味を持たなかった。」 → 他の大物には関心がない。クエだけを追っているのがわかる。</p> <p>・「追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ」 → クエに出会うことが夢となっているから、倒そうとしている。</p> <p>・「父を破った瀬の主かもしれない。」 → 父の仇としてみている。</p> <p>・「もりをつきだす。」 → 今にも倒そうとしている。</p> </div>	○「クエを倒そうとしているのはどこからわかるか」と発問し、太一がクエを追い求めていた心情をつかむ。 ○太一がクエを倒そうとしていた心情を押させる。 ○母の悲しみさえも背負う太一、一年以上もぐり続けている太一から一人前の漁師を目指している太一の心情をつかませる。 ○「では、どこで太一の気持ちが変わったのか」と発問し、太一の心情の転換点について話し合いを展開する。 ☆クエを追い求めていたことを読み取ることができる。(発言)	発問の短冊 本文の短冊 クエの挿絵 もりを持つ太一の挿絵

<p>5分</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">では、太一の気持ちが変わったのはどこかな？</p> <p>・気持ちの変化した場面について話し合う。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>・「水の中で太一はふっとほほえみ」 →泣きそうになりながらの後にほほえみとなっていて気持ちの変化がそこからわかる。 ・「泣きそうになりながら思う」 →一人前の漁師になれないと太一は思っていて泣きそうになっている。心の迷いが表れている。</p> </div> <p>・「水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。」が気持ちの転換点となることをつかむ。</p>	<p>○ 太一がどこで変容したのかを問うことで、どのように、なぜ変容したのかについて話し合いの視点を移していく。</p> <p>○ 「こんな感情になったのは初めてだ」の箇所を上げる児童もいる。その場合、「こんな感情」とは何を指しているのかと発問し、「殺されたがっている」という言葉に着目させ、その時点では太一は殺そうという考えがあることをつかませる。</p> <p>☆ 太一の気持ちがどこで変容したのか理解できる。(発言)</p> <p>○ これまでの話し合いの中から、本当の一人前の漁師になりたい太一的心情をおさえ次の発問へとつなげる。</p>	<p>発問の短冊</p> <p>本文の短冊</p> <p>銀のあぶくをだししている太一の挿絵</p>
<p>25分</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">本当の一人前の漁師になりたいのに、なぜクエを討たなかったのかな？</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>・与吉じいさの生き方に触れ、一人前という考え方が変わったから。</p> <p>・敵討ちで命を奪ってはいけないと太一は気づいたから。</p> <p>・自分が一人前になるよりも海の命を守ることが大切だと考えた</p> <p>・「おとう、ここにおられたのですか」 →クエを父に重ね、そこに父がいたと思うようになり、クエを殺さなかった。</p> <p>・「殺さないですんだのだ。」 ・「大魚はこの海の命だと思えた。」 →敵討ちを成し遂げるよりも、長い間行き続けてきたクエの命をつなぐことが大切だと気づいた。</p> </div> <p>・まとめの感想を書き、発表する。</p>	<p>○ 一人前にならなくていいのかという視点から、太一がクエをうたなかった理由に迫れるようにする。</p> <p>○ 「どの言葉からそう思った」と聞き、本文の言葉を根拠に考えを言わせるさせる。</p> <p>○ 「なんで太一はそんなふうに思えるようになったの？」と発問し、太一がそう思えるようになった原因について与吉じいさの生き方や言葉、父の言葉と関係づけるようにする。</p> <p>○ 話し合いを踏まえて、自分なりの考えが書けている児童を意図的に指名する。</p> <p>☆ 太一的心情の変化について考えたことをノートに書くことができたか。(ノート)</p>	
<p>6分</p>			

